

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立大聖寺実業高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 基本的生活習慣の確立を基盤とし、生徒が資格取得等に挑戦することで自己肯定感を促進させ、自立した学習習慣の確立を図る。	① 本校の授業心得を周知し、授業規律の徹底を図るため、校内外の挨拶を積極的に励行する。また朝礼や授業開始時にロッカーの上や机の周りを点検し、乱れがあれば片付けさせる。	毎日、自ら積極的に挨拶することを心がけ、実行している生徒および教員の割合が A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満 私たちの教室は整理整頓されており、学習に相応しい環境であると感じる生徒および教員の割合が A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	【生徒】 【教員】 評価 A A 後期 98% 100% 前期 98% 100%	集計結果では、生徒の98%、教員の100%が、自ら挨拶することに取り組めたと答えている。その内の生徒57%、教員84%が「している」と回答している。今後も、産業人にとって必要な資質の一つとして、学校における教育活動全体を通して挨拶の励行を指導していきたい。 生徒の集計結果では、80%が学習に相応しい環境であると答えている。しかし、その内、「良好である」と回答しているのは33%に過ぎない。快適な学習環境とするため、学習に不要な物を学校に持ち込まないことや教室の私物の整理整頓だけでなく、体育用具や部活動用具の管理を徹底して行うよう指導していきたい。
	② スキルアップタイムを活用した学習を通して、将来の産業人として必要な基礎学力の定着を図る。	文章を読む力、内容を理解する力、考えを表現する力が向上したと感じる生徒の割合が A 95%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	評価 B 後期 94% 前期 93%	肯定的な意見の割合は94%でB評価であったが、「実感している」と答えた生徒は32%に過ぎず、十分な成果が得られたと言い難い。生徒が主体的に学習し、基礎学力が向上したと実感できるように、さらなる指導方法の工夫と改善に取り組んでいきたい。
	③ 集会やWeb等による定期的な指導を通して、規範意識の高揚と校則の遵守を身につけさせる。	昨年度と比べ、指導件数が A 20%以上減少 B 10%以上減少 C 10%未満減少 D 増加した	評価 D 120.5%の増加 今年度 86件 昨年度 39件	昨年度の39件から86件と大幅に増加したが、校内での携帯電話使用による指導件数が53件と大部分を占めている。指導内容は軽微なものがほとんどであるが、繰り返し指導を受ける生徒は若干いる。大部分の生徒は落ち着いた学校生活を送っている。校内ルールやマナーをきちんと守らせるために、今後も家庭と連携するとともに、校内での情報共有を密にし、指導を受ける生徒の減少に努めていきたい。
関係者評価委員会の評価	なぜ身の回りを整理整頓する必要があるのか、また、なぜ校内でのルールがあるのかなど、生徒にしっかりと考えさせる指導が重要であると思う。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	相応しい学習環境のための整理整頓、規範意識の高揚のための校内ルール遵守など、生徒に意義をしっかりと考えさせたい。指導を行ってほしい。			

重点目標		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2	Society5.0時代に役立つAI・IoT教育や1人1台端末を効果的に活用した指導方法の工夫・改善により、生徒の個別最適な学びと主体的・対話的で深い学びを実践し、確かな学力を身に付けた地域に期待される人材を育成する。	① 学習意欲を喚起する授業の工夫と一人ひとりが主体的に取り組む学習指導を推進する。	1人1台端末の活用や探究活動を取り入れて、個に応じた学習が進められるよう授業の工夫を行っている教員の割合が A 85%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 D 後期 63% 前期 61%	肯定的な意見の割合は教員 63%でD評価で、まだまだの状況である。しかし、「している」と回答とした教員は22%となり、少しずつICT機器の活用など、授業改善に積極的に取り組む教員の割合は増加傾向にある。互見授業や研修などを利用して、各教科でのICT機器の効果的な利活用について、使いやすいアプリケーションについて研究するなど、さらなる工夫改善に努めていきたい。
			授業改善に生かす目的を持って、互見授業に参加した回数が A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	評価 C 1人平均が4.9回	一昨年度から、前・後期に授業公開期間を設定して、5回以上の参観目標を立てて行っているが、達成することはできなかった。次年度は、単に参観回数を増やすだけでなく、ICTの効果的利活用を通して生徒の主体的な学習活動の充実を目的として実施する。さらに、授業後の意見交換の機会を設け、教員の授業改善に繋げていきたい。
		② 質問に対して、根拠や理由を示して答えさせることで深い学びにつなげる。	学習内容について、考える力がついたと感じる生徒および教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	【生徒】 評価 A 後期 98% 前期 97% 【教員】 C 78% 88%	集計結果では、生徒の98%が考える力がついたと答えているが、教員では78%と乖離がある。特に、教員で「実感している」と回答した割合は6%と非常に低い。授業において、生徒自身が考え、根拠や理由を文章で表現する場面などを多く取り入れるようにする。さらなる授業改善に積極的に取り組んでいきたい。
③ 生徒の将来に役立つよう資格取得指導に積極的に取り組む。	3年次にジュニアマイスター顕彰制度30点以上、全商1級合格5種目以上の生徒が合わせて A 10人以上 B 8人以上 C 6人以上 D 6人未満	評価 B 9人	今年度、ジュニアマイスター顕彰制度30点以上は7名、全商1級合格5種目以上は2名で合計9名となりB評価であった。資格取得に向けてチャレンジし、取得していくことが生徒の自信となると思われる。そのため、次年度からも、生徒の実情をとらえながら定期的な補習や個に応じた学習課題の設定など、資格取得の指導に一層力を入れていきたい。		
関係者評価委員会の評価		ICTの利活用については、使うことで教育的効果が十分に得られる場面で活用して欲しい。また、生徒の自己肯定感を少しでも高めるために、良い点を伸ばす指導をお願いしたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		教育的効果が最大限に得られる学習指導、生徒の自信につながる資格取得に向けた指導など、生徒の自己肯定感を高められる指導体制をさらに進めていきたい。			

重点目標		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果%	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
3	学校の教育活動に加え、外部と積極的につながることで、多様な見方・考え方を取り込み、生徒の将来の産業人として求められる人間力を磨き、他を思いやる心豊かな人間性を涵養する。	① 生徒一人ひとりの生徒会活動への参加意識を高め、行事を通して人間的成長を図る。	生徒会行事(聖実祭、校内球技大会)で自ら積極的に取り組んだ生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 A 97%	昨年度の評価86%から大きく増加した。48%の生徒が「意欲的にできた」と回答しており、生徒会行事への積極的参加が向上した。今後も行事を通して人間的成長を図るために、生徒自らが企画した内容を取り入れるなど、生徒が意欲を持って主体的に取り組める行事を検討していきたい。
		② ボランティア活動に積極的に参加することで、奉仕の精神や郷土愛を育む。	年間ボランティア活動に、2回以上参加した生徒の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	評価 D 35%	毎年、学年単位での清掃活動としてのボランティア遠足の実施や部活動単位での様々な地域ボランティア活動に参加している。しかし、生徒は学校行事や部活動の一部であると捉えている。次年度も引き続き、活動にあたり、ボランティアについて意識させ、ボランティアへの理解を深めるとともに、奉仕の精神や郷土愛をしっかりと育みたい。
		③ いじめや不登校の早期発見・早期対応に向け、教員間での情報共有と連携を図る。	教職員の情報交換により、問題の未然防止や早期発見に努めている教員の割合が A 95%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	評価 A 後期 100% 前期 100%	年3回のいじめアンケートに加え、年間5回の教育相談連絡会を開催して、教員相互の情報交換により、「いじめと感じた事案」については、迅速かつ早期に対応できている。次年度も、学校生活全体をとおして、些細な生徒の変化に目を配り、さらに教員相互の情報交換を密にして、安全安心な学校運営に取り組んでいく。
関係者評価委員会の評価		なぜ、ボランティア活動をする必要があるのか、また、清掃活動を通して得られる効果など、きちんと考えさせたいうでの実施をお願いしたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		今までよりも丁寧に、ボランティア活動の目的や意義を生徒に押さえたうでの実施を進めたい。さらには、生徒の自発的な活動となるように、工夫改善を行っていき			
4	開かれた学校の観点からホームページやSNS等を活用し、本校における特徴的な教育活動の情報を積極的に発信する。	① 学校だより、学校Webページ、学校懇談会・見学会、報道等を活用し、保護者や地域等への情報提供を充実させる。	生徒・保護者・地域等に本校の魅力について理解を求める活動を行った回数(新聞等に報道提供した回数)が A 6回以上 B 4回以上 C 3回以上 D 3回未満	評価 A 21回	本校でのさまざまな取り組みについて、保護者や地域の方々に知っていただくために年間を通じて報道提供を行った。特色ある学校行事、機械システム科と情報ビジネス科の独自の取り組みはもちろん、部活動単位での地域ボランティアへの参加などと、多岐に渡り報道提供した。次年度も、本校の魅力をさらに校外でアピールするため、積極的に新聞等に報道提供を行っていく。
		関係者評価委員会の評価		即座に伝えられるツールとして、SNS等を活用した効果的な発信を通して、本校の教育内容と魅力を伝えて欲しい。	
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		新聞等の報道提供に加えて、SNS等を活用した情報発信にも積極的に行い、魅力的な本校の取組を保護者や地域の方々に知っていただけるように進めていきたい。			

重点目標		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果%	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
5	危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対応できる学校組織を構築する。	① 登下校中も含めて、生徒が安全安心な学校生活ができるように、教員間で情報共有と連携を図る。	危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対応できる学校組織となっていると感じる教員の割合が A 85%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 A 後期 94% 前期 100%	生徒だけでなく教職員にとっても、安全安心な学校となることは、充実した教育活動となるために必要不可欠である。今後も、全教職員が危機管理意識をしっかりと持ち、緊急時にも適切に対応ができるように、日頃から情報共有と連携を密にしていきたい。
関係者評価委員会の評価		教職員だけでなく、生徒間でのチェック体制を整備して、二重三重で確認を行う危機管理体制も検討して欲しい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		さらに危機管理意識を持って、常に適切な対応ができるように、きめ細かな体制整備を進めていきたい。			
6	教職員のウェルビーイングを高めるために、校務の効率化・平準化を実現し、より効果的な教育活動を行う。	① 時間管理の意識を高め、日頃から生徒とのコミュニケーションをとる時間を確保することに努める。	採点業務省力化ソフト等の活用で業務の効率化を意識し、生徒と向き合う時間を確保するよう努めている教員の割合が A 85%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 B 後期 81% 前期 88%	採点業務省力化ソフトの使用率は81%となり増加傾向にある。しかし、「生徒と向き合う時間を十分確保している」と肯定的に答えた教員の割合が昨年度の55%から34%と大きく減少した。次年度からも、採点業務省力化ソフトを積極的に活用していく。また、生成AI等の活用も促し、学校全体で業務の効率化を図り、全教職員が生徒に向き合えるように時間確保を行っていきたい。
		② 若手教員とのOJTを通し、探す無駄、待たされる無駄、やり過ぎる無駄を減らすことに努めるとともに業務の可視化を進める。	次年度へ業務を引き継ぐことを前提に置き、メモやマニュアル等を残しながら仕事をしている教員の割合が A 95%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	評価 B 後期 88% 前期 85%	次年度へ業務引継ぎを念頭に置きながら校務にあたっていると、肯定的に答えた教員の割合は昨年度の91%から88%に減少した。日々の業務に対して優先順位を付けて、見通しをもって業務に取り組む体制を学校全体で整備していきたい。業務がスムーズにはかどれば、生徒と向き合う時間の確保にも繋がると思われる。
		④ 教員1人ひとりの時間外勤務について実態を把握するとともに、時間外勤務を減少させるべく校務の効率化を行うとともに、年休の取りやすい職場環境を構築する。	時間外勤務月45時間以上の教員の割合が年間で A 20%未満 B 25%未満 C 30%未満 D 30%以上	評価 B 21.6%	時間外勤務45時間以上の教員の割合は、昨年度の23.3%から21.6%と若干であるが減少した。しかし、時間外勤務60時間以上の教員の割合は、昨年度の12.8%から13.0%と増加した。さらに、校務の効率化・平準化を進め、時間外勤務の多い職員数の減少に取り組んでいきたい。
関係者評価委員会の評価		教職員のウェルビーイングを高めるために、校務の効率化と平準化をさらに進めて欲しいが、教育の根幹である生徒と向き合う時間は十分に確保して欲しい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		校務の効率化と平準化を進めながらも、生徒にとって教育効果の高い活動には十分に力を注ぎながら、さらなる職場環境の改善を進めていきたい。			